

女狐

栗本



講談社

女狐

定価 九八〇円

第1刷発行 昭和56年7月20日

著者 栗本 薫

発行者 三木 章

発行所 株式会社 講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111 (大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

© 1981 KAORU KURIMOTO Printed in Japan

目次

女狐

5

お滝殺し

41

あぶな絵の女

75

赤猫の女

101

蝮の恋

129

商腹勤兵衛

161

微笑む女

187

心中面影橋

207

装帧
安彦勝博

女狐

女狐

お艶の顎はくくれたようにふつくりと二重になっていた。眉がないのは、落とし眉のせいではなくて、生まれつきらしい。唇も厚くそりかえっていて、そのためにお艶の顔は酷薄と紙一重のところ、ひどく肉感的な印象を与えた。

首が長く、色が白い。目が細くて切れが長い。なんとなくぼつりと脂ののった肉体を想像させるのも、その顔のためである。伝次は、そのお艶の顔のために、三人の人を殺めた。

お艶の育ちや、本当の身元、父母がどんな人であったか、については、伝次はよく知らぬ。お艶は無口な女である。しかしそれはお艶の内気をあらわすのでなく、むしろ倔傲な沈黙といってよかった。

お艶に軽蔑されていることぐらい、伝次も知っている。お艶は、仰臥して伝次に身体じゅう舐めまわされながら、

(犬……)

そんな、さげすみきった表情で、目を開いてい、その目を知るたびに伝次は狂気のようにいきり立ってお艶のからだに攻撃を加え、結局いつも敗北するのは男のほうであった。お艶が、伝次に抱きしめられて、ひた泣きに泣かされる、などということは、決してない。お艶のからだは、快樂という

ものを感じる能力を欠いているかに見えた。

（俺が、女の遊びを教えてやる）

それは伝次の意地になり、若い伝次は毎夜のように際限のないおのれの精力を傾けつくすのだが、お艶はいつもただ、棒のように横たわり、そのくちびるが伝次の名を呼ぶことも、熱いあえぎを洩らすことも、決してないままである。

ひとりの女を、こんなふうに閉ざさせてしまった、お艶の過去の生活が、どんなものであったかも伝次は知らぬのである。知っているのは、ただ、お艶が田原町の仏具屋の老舗近江屋の内儀であったことだけなのだ。近江屋は三十人からの人を使う大店である。ただの貧しい人足であった伝次などの、到底知らぬ世界の女だった。

伝次は、庭石運びのために近江屋に出入りするようになってからも、ずっと、何がなしこの女主人を畏れていた。

お艶は、あとできくとまだ二十二、三にしかなくていなかったはずだが、三十近いように老成して見えた。いつもいい装いをし、座敷に香をたき、文机をおいてきつちりと座っている。

奥庭に石を運ぶ人足たちは、よくその彼女に座敷の中から、そこにどれを置き、それはどうしろ、と指図されたが、皆、荒くれ男のくせにお艶をひどく怖がっていた。

お艶は、仏像を思わせる顔立ちをしている。何を思っているのか、感じているのか、その眉のな、眉根の肉だけが少し青みがかって盛りあがっている顔からは、見当もつかない。

「帯に懷剣をはさんでいそうだぜ」

「能面みてえだ」

女話ならたちまち下の品定めに落ちる人足どもも、少し勝手が違うとみえて、お艶に限っては、そんなふうには云わない。お艶と、表でゆったり座っている太った主人の源兵衛との、夜の乱れ姿は想像もつかない。夫婦のあいだに子はなく、甥の倉次郎を仕込んでいる。

お艶は、武家の女である、とそこへ伝次は耳にしたような覚えがあるが、それとても、いかにもそれらしきから流れた噂にすぎなかったかもしれない。

お艶には、何か、異常なもの——血の温度の低さを思わせるようなものがある。しかも、顎のくくれた仏像のような顔は、肉感的ななまめかしさを湛えている。

源兵衛——老獺で、あぶらぎった顔をした、彼女とは二十近く年のはなれているらしいその男と、どんな夫婦仲であったかも、伝次には想像の外である。いつ見ても、夫婦は別々のところで別の用事をしており、といって、かれらの夜の話を伝次は噂にもきいたことがない。一体に、近江屋の者たちは、内証のことを喋らぬよう、しつけられていた。

そんなことしか知らぬ伝次に、この暗くひんやりとした奥座敷に端座して、いまから思えば経でも写していたらしいお艶の冷えびえとした姿のなかで、何がたくわえられていたのか——一体、どんないわれがあつて、どんな絶望がその彼女をむしばんでいたのか、知るすべのあらう筈もない。お艶は、伝次には、美しく高貴な御新造様であつた。冷やかな傲慢なものごしに反発を感じるだけのしたたかさも、人足の中でいちばん若い伝次には、まだ具わっていなかった。

お艶をかいま見るたびに、伝次は、まったく違う世界への畏怖と憧憬に似た物悲しい感情に胸をふるわせた。といって、それがお艶への恋情であつた、というのでもまったくない。それは要するに、伝次の知りえない、彼のものでない、そしてこれからもそうなることのないであろう世界の象徴だつ

た。お艶は、黒光りする仏像の冷たさとなまめかしさを漂わせて、えりもと衿元をきつちりとあわせ、人足などを人臭いと思うけぶりすらない半眼であれこれと指図をした。

だから、もうじきに仕事が終わろうという一日、いつものようにその進行ぶりを冷やかに眺めていたお艶が、突然廊下へあらわれて、彼を手招いたとき、伝次は何を怒られるのかとおそれおのいたのである。

風は冷たいが、空はやわらかな青で、陽光がちらちらと葉末を輝かせているような季節に、えんじ臘脂の着物の裾をひいた大店の内儀らしい姿のお艶のまわりだけが、ひんやりとした空気をたたえて沈みこんで見えた。

おどおどする伝次を座敷に呼び上げたお艶は、伝次に名をたずね、用意してあった茶をふるまった。

「御新造様、こんなところにあがりこんで、お叱りを受けてしまいます」

おのれのボロ姿や、庭からも見たことのない冷えびえとした奥座敷、その贅ぜい沢な調度、これほどまぢかく見たのははじめてな、お艶の姿、などにことごとくふるえあがった伝次が吃どもるのを、お艶は無表情にきいていたが、

「ともかく、お茶をお上がり」

勧めた。そ、そうをしては、と汚れた掌を幾度も手拭にこつそりなすって、塗りの蓋のついた華奢わしゃな茶碗をとり、伝次は茶の味もなにもわからぬ思いで飲みほした。咽喉のどをとおるとき、刺すような苦みを感じたが、それどころではなかった。

伝次が飲むのをじっと見守っていたお艶が、おだ穏やかな声で云うのを伝次はきいた。

「お前、私と相對死あひたじしておくれでないか」

しばらく伝次は意味がわからず、何の驚きも感じなかった。そのことばの意味が、ふいに心におちてきたとき、既に、伝次の胸は得体の知れぬ苦しさにつきあげられはじめ、驚愕に目を瞠なはつたまま、身体が金縛りになり、目の前がぼうとかすんできた。

何か叫んだつもりだったが、声は出ていなかった。

（さっきの茶に何か入れやがったのだ。おお、女め、畜生、俺を……）

脈絡もなくなつた脳裏に、ようやくそれを思いついたが、そのとき、目の前で、お艶の顔がふいに大きくふくれあがつて視野をおおいつくした。女が、ぐいと近づいてのぞきこんだのである。古雅な道具立の顔の、豊かで厚ぼつた唇の両脇がひき結ばれたままゆるやかにつりあがり、妖しい微笑をかたちづくり、その目は半眼に伝次を見つめている。お艶の顔が、恐しく酷薄に、肉感的に、伝次の顔に迫つて来、そのくちびるが笑みをうかべたまま、伝次の口にふれた。

（こ、殺されるのだ。訳もわからねえで、この女に……）

再び、乱れた思考の中をその恐怖がつらぬいたとき、ふいに伝次は激しく勃起した。お艶の白い顔がかつて何かの絵で見た菩薩のそれと入りまじり、伝次ははてしなく小さくなって、その柔らかな足に踏みにじられる亡者となつた。

しばらく苦悶した末に、ガツと血を吐いて横転した伝次の若々しい顔が、苦痛と恍惚の奇妙に溶けあつた法悦にひきゆがんでいるのをお艶は見おろし、無感動に自分の茶碗をとりあげた。

お艶がいったい、どんな理由で伝次を選んだのか、それより、毒が本当に致死量であつたかすらわ

からない。伝次もお艶も、直ちに家人に見つけられ、手当の結果生命をとりとめ、そのまま心中者として奉行所に引かれたからである。本来なら、心中者の仕損じは、首をうたれてもしかたのないところであつたが、どのように調べても、お艶と伝次が不義密通をはたらいていた、という事実は見出されなかった。その上に、お艶がはたして伝次本人をそれと知って毒をのませたのかさえさだかではない。本人たちは、毒のために何をきいても答えられる状態でない。それへ、近江屋の親族の懸命の運動もあつて、結局ふたりは二人ながら日本橋に三日間生き晒しの上、非人落としということで生命をゆるされた。

そのへんの何日、何ヵ月は、しかし伝次には、夢ともうつともつかぬ記憶でしか残っていない。蘇生のおそろしい苦痛と嘔吐、悪夢と白洲の光景が入りまじり、お艶の顔が浮かんで遠のき、耳のはたにがんと意味のとれぬ声がひびき、悲鳴をあげ——波に浮きつ、沈みつするように溺れ喘いでいた伝次は、どこからが本当にあつたことで、どこからが熱に浮かされた幻想なのかさえわからなくなっていた。

ただ、その波の中でゆるやかに身をもがいている悪夢のような日々の中に、ひとつだけ浮き出して鮮明な記憶が残っていた。それは、日本橋のたもとの高札の下で、晒されていた時間のうちのいつかである。

おそらく、毒が少し彼の脳を冒し、まだのこらずは抜けきっていないくて、伝次はぼんやりとしたなり、ろくな申し立てもできなかった。そのために、どうやらうすのろと見做されて情をかけられたらしい。下帯ひとつの裸にされて枷をかけられ、引きまわされ、高札の下につながれたこともすべて夢うつつだった、はッと心の焦点があつたとき、彼は見るも鮮やかな白さで盛りあがつた、ゆたかな

乳房を見た。

棒色のうすい乳首は殆ど白い肉に埋もれており、その上に荒縄が、あやしいなまめかしさを見せて食いこんでいた。愕然としておもてをあげた伝次は、青ざめた顔に何の表情もなく、目を半眼に、侮蔑するように下唇をそらせ、湯文字ひとつの半裸をさらされているお艶を見た。

それが誰で、どんな人間で、自分とどんなかわりがあるのかも、心に入つて来ぬままに、伝次はそのまぼろしのようにあやしい美しさに驚愕したのである。或いは、その刹那から、伝次は魂を呪縛されたのかも知れぬ。

(な、なんで——どうしてこんな……)

そのとき彼は自分が何者で、女が誰で、何ゆえにこうしているのか、ここがどこなのか、の認識すら失っていた。世界は水底であり、半裸の女はそこにすまいする女魔とも思えた。それは、午なかばであつたらうか。陽光がきらきらとふり零れて来、一瞬世界はなんの生物も持たぬ静寂の底に沈んだ。

ざわざわと、物見だかい群衆が、晒し者のかれらに投げつける嘲罵の声がひとつになって、黒い波のように彼の意識に打ちよせてきたとき、長い長い睡りから、ようやくさめたように目を睜った伝次は、人の頭の波のいちばんうしろからのぞいている、うつけたような顔が、明らかに正気を失った近江屋のあるじの源兵衛のそれであるのを見つけた。

三日の晒しののちに、伝次とお艶は浅草の非人頭善七の手に下げわたされた。伝次はお艶を連れて、浄念寺裏の非人溜の一隅に小屋をもらい、小頭武助の配下に入った。別々の溜に入るか、それとも一緒になるかを問われたとき、

「どうぞ、二人一緒に——」

お艶がつつましげに頭を下げたことを、伝次は知らない。

別に、正気が戻ってからも、伝次はお艶を問いつめも、罵りもしなかった。寄場帰りの人足の彼には、非人になったところで失うべき何ものもなく、どのみちこれからさき、もつとよい生活がひらける見通しがあつたわけでもなかったのだ。それに、彼は、うまく表現はできなかったが、何とはなしに、お艶があのような行為に走つた理由が、感じとれるような気がしていたのだった。お艶もまた、この世のなかに、のりこえることのできぬ巨大な暗黒を見たのにちがいない。それは、この時代の最下層の人間である伝次がたえず見ていたものだった。若くて美しい大店の内儀もまた、人足の彼と同じ暗黒をみていたことに、わけもわからず伝次は感動していた。

そして、それよりなにより、彼は、お艶に、既に激しく恋慕していたからである。

その恋慕は、殺される——と感じた刹那のあの痺れるような法悦の残滓からであつたか、それとも晒されながら見た輝くような、まだ若いむっちりとした乳房にはじまったのか。

その日暮らしの人足で女房の来てくれ手のいようわけもない。といって女なしで、二十四、五までいられぬから、安い夜鷹、舟饅頭、じごくを買いもしたが、金が入れば安酒を買い、ころに入れあげるのが先になつた。

（俺の女——）

しかも、大店の若内儀であつた妖艶な女。そう思うとき、伝次はわくわくとふるえた。いっそ、そこに幸福があるからこそ、神の慈悲でこの底の底まで落ちてきたのかと思うほどだった。

伝次は、そのお艶が眩しくて手がふれられず、二人暮らしの四日めになつて、漸く、口をからから